



長久寺遺跡第2次 発掘調査報告書



2022年4月
株式会社 島田組







- 1 本書は、名古屋市東区白壁三丁目 2801 番 1、2809 番 1、2810 番 1 地内において株式会社愛洋産業が計画された事務所ビルの建設に伴い、株式会社島田組が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。
- 2 本調査の面積は、215 m²である。
- 3 調査期間は令和 4 年 1 月 11 日から 1 月 31 日まで実施した。
- 4 現地調査実施にあたっては、名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室（以下「文化財保護室」という）真鍋直子氏の指導・監督のもと株式会社島田組が実施した。
発掘調査は、監督員 安孫子雅史、調査員 市田英介、測量 堀場集理が担当し行った。
- 5 本書の執筆は、II (1) を文化財保護室 真鍋直子氏、I、II (2)、III、IV、V を市田英介が担当した。
- 6 本書で示す方位、座標は国土第Ⅷ系（世界測地系）による。水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。
- 7 本書で使用した土壤色名及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 8 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編一』に準じた。
- 9 現地調査では井上健三、奥淳一、尾崎裕司、高田茂、水野正博、整理作業では松田直子、宮原温美、阪田恭子、須藤歩の参加を得た。
- 10 発掘作業と整理作業で作成した実測図、写真、台帳等の記録資料及び出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 調査の成果 遺構	4
IV 調査の成果 遺物	10
V 総括	13
図 版	14



I 遺跡の位置と環境

名古屋市中央部には、熱田台地と呼ばれる洪積台地が存在する。北西部は東丘陵へとつなぐが、この中央部に旧矢田川の浸食により形成された大曾根の窪地が南北方向へ帯状に分布する。

対象地は大曾根の北西部、熱田台地の北縁上に位置する。この付近は、台地でも標高の高い位置にあたり、段丘下の北方約150mにある名鉄瀬戸線尼ヶ坂駅までの比高差は約10mである。

この台地北縁の段丘に沿って、本遺跡や北東に隣接して片山神社遺跡、南西部に東二葉町遺跡が存在する（図1、2）。以下、調査地域に所在する3遺跡の既往の調査から、当地域の時代毎の移り変わりを概観する。

縄文時代 長久寺遺跡は市内で最初の縄文遺跡の発見となる貝塚が確認されていたが、金城学院中学校内で行われた調査で、中期の竪穴建物、土坑、ピットが検出され、当該期の集落の存在が明らかとなった。片山神社遺跡では、早期から晩期の遺物が認められ、中期の炉跡が検出されている。東二葉町遺跡では、中期の竪穴建物とピットが検出されている。

この地域では、縄文時代早期から人々の活動がはじまり、断続的ではあるが人々の営みが続いていたことが窺える。

弥生時代 長久寺遺跡、片山神社遺跡で前期の溝、中期では片山神社遺跡で土器棺が検出されている。当城の様相が明らかなのは後期である。方形周溝墓が造営されており、墓域として利用される。

古墳時代 これまで、円筒埴輪の出土が認められていたことから、古墳の存在が示唆されてきたが、長久寺遺跡で中期の土坑から埴輪棺（4世紀後葉）が検出され、古墳が近隣に存在することを裏付ける結果が得られている。埴輪は後期までのものが出土している。東二葉町遺跡では、中期の円墳の周溝、ピットが検出されているほか後期の遺物が出土している。

古代 東二葉町遺跡では、7世紀末から8世紀前葉の竪穴住居、長久寺遺跡では、奈良時代の竪穴建物、溝、土坑、ピットが確認されている。片山神社遺跡では平安時代10世紀の灰釉陶器がまとめて出土しているほか、住居跡らしき構造を検出したとの報告がなされている。

中世 片山神社遺跡で掘立柱建物に伴うと考えられるピット群が確認されているのをはじめ、長久寺・東二葉町遺跡でもピット、土坑、溝が検出されている。時期は概ね鎌倉時代（13世紀）であり、当該期に活発な土地利用があったことが窺える。

中世末以降は、長久寺の寺域、武家の屋敷地として利用され、近世後期から町屋となる。



図1 周辺遺跡分布図

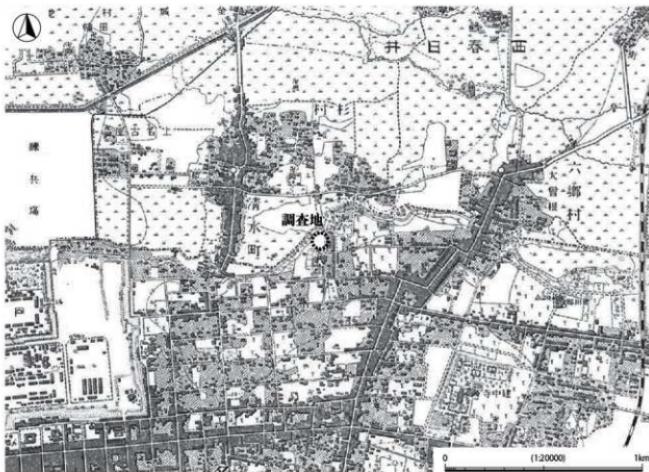


図2 調査地地形図（「2万正式図」明治24年）

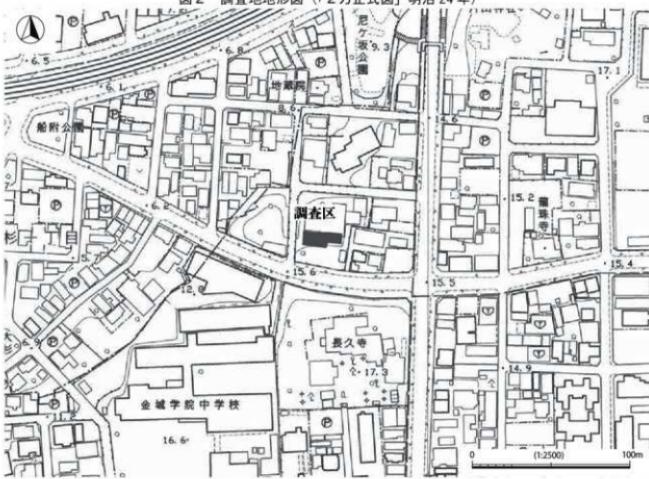


図3 調査位置図

II 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、株式会社愛洋産業（以下、事業者）が名古屋市東区白壁三丁目 2801 番 1、2809 番 1、2810 番 1（図 3）に事務所ビルの建設を計画し、名古屋市教育委員会（以下、教育委員会）に埋蔵文化財の取り扱いについて照会をしたことに始まる。令和 3 年 6 月 18 日に事業者より試掘調査依頼書が提出されたため、試掘調査を実施した。その結果、中世の遺物及び遺構が確認された。6 月 30 日に文化財保護法（以下、同法）第 93 条第 1 項に基づく届出（解体工事）が提出され、7 月 13 日付け 3 教文第 4-133 号で工事立会の旨通知をした。解体工事に伴い旧建物及び築山など試掘調査時に調査することが出来なかった場所について跡踏の既存状況を確認した。9 月 24 日に同法に基づく届出（新築工事）が提出され、10 月 8 日付け 3 教文第 4-204 号にて発掘調査の実施を通知した。12 月 1 日に事業者、株式会社島田組、教育委員会の三者において協定を締結し、翌 12 月 1 日に同法第 92 条第 1 項に基づく届出を愛知県県民文化局に提出した。12 月 9 日付け 3 文芸第 2002 号にて受理通知を受けたため、令和 4 年 1 月 11 日より調査を開始した。

(2) 日誌抄

令和 4 年 1 月 11 日に調査区の設置、発掘道具・機材、重機、仮設事務所等の搬入作業を行った。

1 月 12・13 日には、文化財保護室 真鍋直子氏による調査範囲の確認の後、西から機械掘削、遺構検出を行った（図 4）。

1 月 14 日には、調査区全面を清掃し遺構の検出を行った。

1 月 17 日には、ピット、土坑の半裁、重複する SD01 と SF01 の重複関係を確認するためサブトレンチを設定し掘削を行った。

1 月 18～21 日には、ピット、土坑、SD01 の記録作業を行いながら完掘したのち、SF01 の掘削を行った（図 5）。

1 月 25 日には、遺構完掘全景撮影に向けて、調査区全面の清掃と場内の整理を行った。

1 月 26 日には、遺構完掘全景撮影。ラジコンヘリコプターを用いた空中撮影。遺構平面図、調査区壁断面図等の記録作業を行った。真鍋直子氏による完掘状況の検査が行われた。

1 月 27・28 日には、調査区の埋戻し、調査資材等の撤去作業を行い、31 日に重機、仮設事務所等を搬出し調査を終了した。



図 4 機械掘削、遺構検出状況



図 5 SF01 掘削状況



III 調査の成果 遺構

(1) 調査の概要

調査地は台地北縁辺の標高約17.0mに位置し、西、東側は宅地造成の際に行われたと思われる切り土により急斜面となる。調査区は東西25m、西辺9m、東辺7mの長方形形状を呈し調査面積は215m²である。試掘調査にもとづき盛土及び擾乱を地面上まで重機で除去し、以下は人力で掘削を行った。遺構の測量はトータルステーションと写真測量を併用した。

遺構は地山上面($T.P = 16.6 \sim 16.3m$)で検出した。検出面は西から東へ傾斜する。強く削平を受け、重機の爪痕が複数個所残るなど多くの擾乱がみられた。遺構は、平安時代(11世紀前半)の道路遺構、鎌倉時代(13世紀前半)のピット1基、土坑3基、溝1条、鎌倉時代(13世紀後半)以降の掘立柱建物1棟を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砥石、瓦などが出土した。

(2) 遺構の概要

1. 基本層序(図6、図版2)

第1層 盛土

第2層 撤乱

第3層 灰色(10Y5/1)粘質土 中～粗砂が混り、地山ブロックを多く含む。

現代の攝影及び整地土

第4層 明赤褐色(2.5Y6/8)粘質土でシルト混じる。地山

第5層 灰白色 (10Y7/2) 破質土 粗砂主体でしまりが無い

2. 遺構(図7)

遺構はピット1基、土坑3基、溝1条、掘立柱建物1棟、道路遺構を検出した。時期は出土遺物からピット、土坑、溝は鎌倉時代（13世紀前半）、道路遺構は平安時代（11世紀前半）に属す。埋土は鎌倉時代のものは暗褐色土（7.5YR3/4）、平安時代のものは褐灰色土（7.5YR4/1）を呈する。以下各遺構の概要を記す。

平安時代（11世紀前半）

道路構造を検出した。

SF01 (図7・8、図版3)

調査区西部で検出した南北方向に延びる道路遺構である。傾きはN-17°-Eである。規模は南端の上端幅が1.89m、下端幅が0.78m、深さ0.41mである。北端の上端幅は2.72mで下端幅は1.4m、深さ0.52mで、底面は南から北へ0.35m低く傾斜する。底面の中央は、楕円形の窪みが連続して並ぶ、波板状凹凸面と呼ばれる窪みを確認した。埋土は褐灰色(7.5YR4/1)粘質土と、底面の窪み埋土であるにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土の大きく2層に分かれる。窪み内の一一部では、直径5cmの大の角礫や玉砂利状の礫を検出したが、流水の痕跡が認められなかつたことから、人為的に入れられたものと考えられる。硬化面は確認できず、埋土にしまりもみられなかつた。SD01と重複し切られる。遺物は土師器、灰釉陶器、須恵器などの遺物が少量出土した。

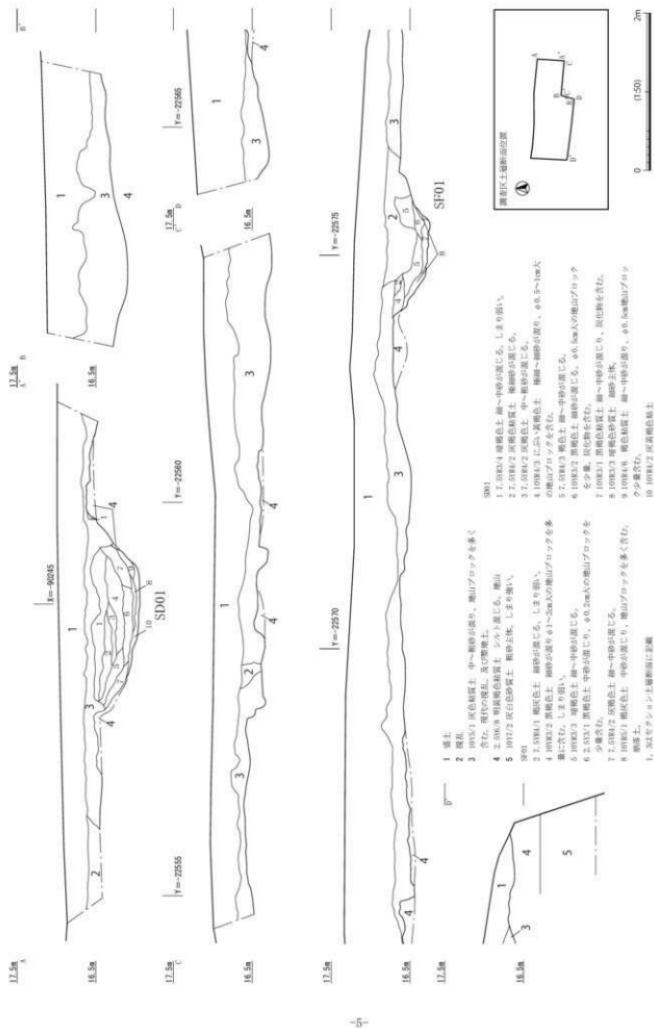


図 6 東・南壁土層断面図

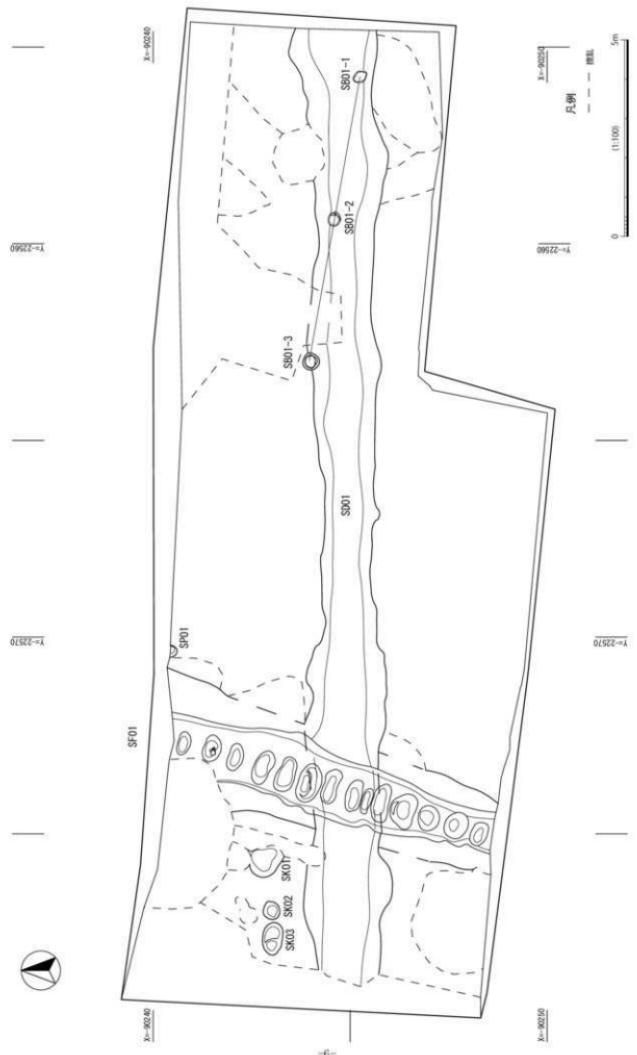


图 7 通排平面图

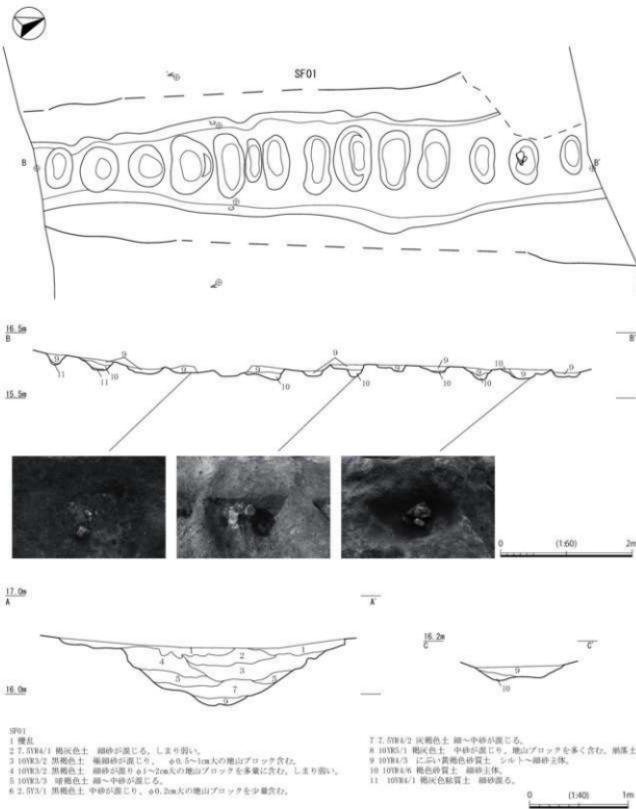
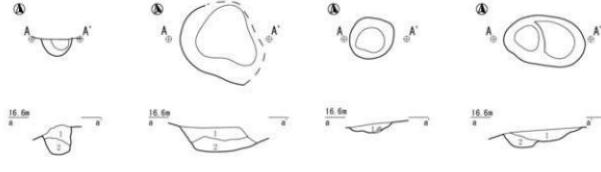


図8 SF01 平・断面図

ピット1基、土坑3基、溝1条を検出した。

SF01 (図7・9)

調査区北西部のSF01東肩横で検出した。北部分が調査区外に延びる。検出規模は長軸0.31m、短軸0.17m、深さ0.26mである。埋土は細～中砂が混じる暗褐色土(7.5YR4/4)を主体として下部に地山のブロックが多く混じる。



1. 7.5YR3/4 黒褐色土、細～中砂が混じり 1. 7.5YR3/4 墓場土、細～中砂が混じり 1. 10YR4/2 黑褐色土、中～粗砂が混じる。
φ 0.5cmの大さの地山ブロック含む。
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色土、細砂が混じり 2. 10YR4/4 褐色土、細砂が混じり 0.5~1cm
φ 1cmの大さの地山ブロックを多く含む。
3. 大きな地山ブロックを多く含む。

1. 7.5YR3/4 黑褐色土、細砂が混じる。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土、細砂が混じり 0.5~1cmの大さの地山ブロックを含む。
3. φ 1cmの大さの地山ブロックを多く含む。

図9 SP01, SK01 ~ 03 平・断面図

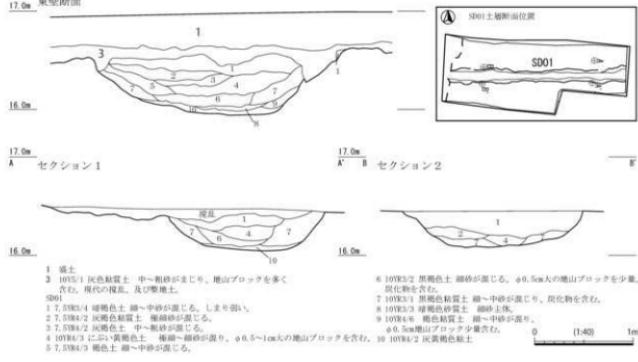


図10 SD01 土層断面図

SK01 (図7・9)

調査区北西端部のSF01 西肩横で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 0.89m、短軸 0.77m、深さ 0.34m である。埋土は上層が細～中砂混る暗褐色土 (7.5YR3/4)、下層が地山のブロックを多く含む褐土 (10YR4/4) である。

SK02 (図7・9、図版5)

調査区北西端部のSK02 の西で検出した。平面形は円形を呈する。規模は長軸 0.48m、短軸 0.43m、深さ 0.08m である。埋土は中～粗砂が混じる黒褐色土 (10YR3/2) である。

SK03 (図7・9、図版5)

調査区北西端部のSK02 の西で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 0.83m、短軸 0.5m、深さ 0.1m である。埋土は上層が細砂が混じる暗褐色土 (7.5YR3/4) で下層は、細砂が混じるにぶい黄褐色土 (10YR4/3) である。底面の西側に柱痕と思われる窪みがあることから抜き取り

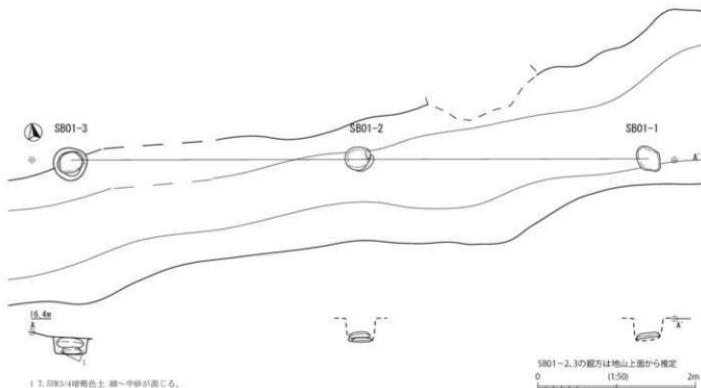


図 11 SB01 平・断面図

穴と思われる。

これらのピット、土坑内からの出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から、中世に属するものと考えられる。

SB01 (図 7・10、図版 4・5)

調査区中央部で検出した東西方向に延びる溝である。規模は西端が上端幅 0.96m で下端幅は 0.64m、深さ 0.38m、東端は上端幅 2.24m で下端幅 1.52m、深さ 0.53m である。底面は西から東へ 0.25m 低く傾斜する。埋土は大きく 3 層に分かれる。1～4 層は埋戻し土で、しまりの弱い暗褐色 (7.YR3/4) 粘質土である。5～7 層も埋戻し土で黒褐色 (10.YR3/2) 粘質土である。8～10 層は掘削直後の機能時の堆積層で最下層に粘土、この上層に砂質土が堆積する。

1～4 層と 5～7 層では層様に変化がみられ、遺物が 4 層の標高で多く出土したことから、再掘削が行われたと考えられる。遺物は山茶碗、円筒埴輪などが出土した。

鎌倉時代（13世紀後半）以降

掘立柱建物 1 棟を検出した。

SB01 (図 7・11、図版 5)

調査区東部で検出した掘立柱建物である。北西-南東方向に 3 基並ぶ。柱穴内には直径 0.3 m 大の平らな円礎の根石があり、内 2 基は礎 2 個が重ねておされていた。柱間は 3.6 m (約 12 尺) である。礎は、SD01 の掘削中に確認し、溝に伴うものと考えていたが、後に SB01-3 を検出し、間隔や縫上面のレベルがほぼ同じであること、SB01-2 が SB01-3 と同様に円礎を重ねてであることから、建物に伴う根石であることを確認した。建物は N-10°-E 傾く。柱穴の展開については、北は擾乱、南は調査区外に位置する寸法であるため不明である。時期は SD01 を切ることから、鎌倉時代（13世紀後半）以降である。



IV 調査の成果 遺物

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砥石、瓦などが出土した（表1）。

SF01出土遺物（図12、図版1・3）

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。

1は土師器で小型の壺の口縁である。古墳時代前期に属するものと思われる。

2～5は灰釉陶器である。2、5は、高く直線的に延びる高台をもつ。3は皿で、外面に軸がかかる。H72 瓢式である。4は高台断面が三角形状を呈することから百大寺瓢式と考えられる。

6は須恵器の鉢で、平底で体部は直線的に延びる。そのほか37（図版6）の水瓶が出土した。

SF01出土遺物（図13、図版1～3）

弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、円筒埴輪、砥石、サヌカイト片などや混入品であるが、陶器、瓦器が出土した。

7は弥生土器の壺で、沈線を施したのち、竹管文を施す。弥生時代前期に属する。

8、9は円筒埴輪で、外面に8は縦方向のハケ、9は横方向のハケを施す。9は川西編年の第IV期である。

10は須恵器の甕である。外面はタタキ、内面は丁寧にナデを施す。古墳時代中期初頭のものと思われる。

11、12は灰釉陶器の碗である。11は内面に目跡が残る。外面は施釉前にハケ状の工具で調整を施す。12の器壁は薄く、底部端部に粗穂の圧痕が残る。いずれも、底部から緩やかに立ち上がることから百大寺瓢式と思われる。

13～30は山茶碗である。第5型式から第6型式に該当するものと考えられる。13～16、24は胎土が密な東濃型で第5型式と考えられる。高台は低いものの形状が三角形を呈する。24は、口縁端部を丸くおさめる。17～23、25～30は、砂粒を多く含む胎土の粗い尾張型である。第5型式は21、22、26である。26は口縁端部にやや丸みがみられる。19、21は高台がやや高く厚みをもつ。第6型式は17、18、20、22、23、25、27～30と考えられる。17、18は小皿で、直線的に開き、口縁端部に厚みをもつ。25・27は、口縁端部に面をもち、ヨコナデが明顯である。20、22、23、28～30は高台が低く、調整も粗いが、体部への立ち上りに丸みがある。13、15、27、30の底部には、粗穂の圧痕が残る。

31は瀬戸美濃系の播鉢、32は瓦器の風炉である。いずれも混入品で近世以降のものである。

33・34は砥石で、33は風化し擦痕は不明瞭である。34は両面と、側面の一部に砥面が残る。そのほか41（図版8）の大型の砥石も出土した。

第2～3層内出土遺物（図14、図版3）

近世以降の陶磁器、瓦の他、土師器、須恵器、山茶碗、円筒埴輪、砥石などが出土した。

35は常滑焼の甕である。口縁上端は平坦で内面は突出し、外表面は厚みをもつ。36は瀬戸美濃系の皿である。時期はいずれも近世以降である。

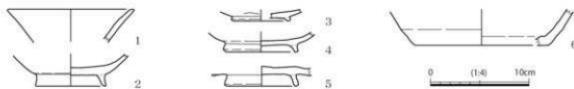


図 12 SF01 出土遺物

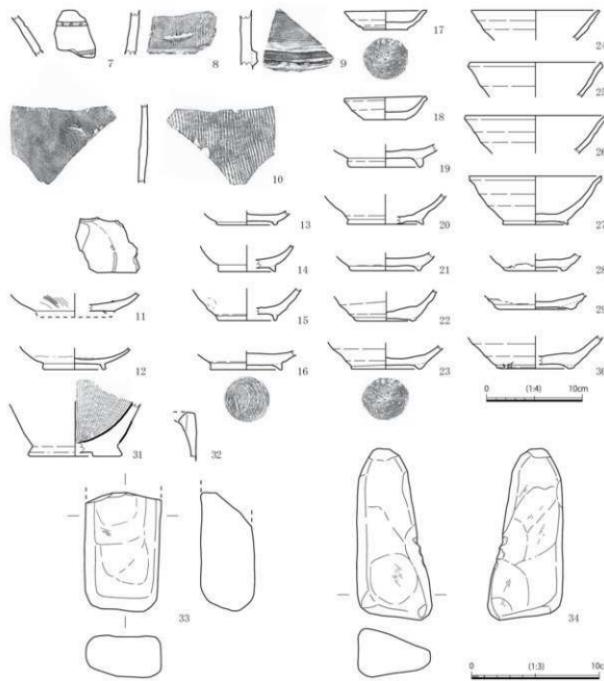


図 13 SD01 出土遺物



図 14 第 2 ~ 3 層出土遺物



表 1 遺物類別表

遺物番号	種類	種別	出土遺構	口径 (mm) (口徑×奥) （口徑×奥）	底径 (mm) (口徑×奥) （口徑×奥）	器底 (mm) (口徑×奥) （口徑×奥）	容積 (ml)	保存率 (%)	焼成	紡土	色調	備考
1	土師器	壺	SP01	12.8	—	(3.4)	1110	硬	やや粗	内:103W6.6 附黄色 外:2.077.2 黄褐色 外:2.077.3 深黄色 外:2.077.4 白色		
2	灰陶陶器	瓶	SP01	—	7.0	(3.3)	底50	硬	密	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 白色		
3	灰陶陶器	瓶	SP01	—	8.4	(1.2)	底15	硬	密	内:2.077.2 白色 外:2.077.3 白色		
4	灰陶陶器	瓶	SP01	—	7.0	(2.1)	底100	硬	密	内:2.077.2 黄褐色 外:2.077.3 深黄色 外:2.077.4 白色		
5	灰陶陶器	瓶	SP01	—	7.0	(2.0)	底100	硬	密	内:2.077.2 黄褐色 外:2.077.3 黄褐色 外:2.077.4 白色		
6	頸壺器	杯	SP01	—	13.6	(3.7)	底5	硬	やや粗	内:2.075.6 明黄色 外:2.075.6 明黄色 外:2.075.7 明黄色		
7	弥生土器	壺	SD01	—	—	(4.0)	体筒礪片	やや粗	やや粗	内:2.075.6 明黄色 外:2.075.6 明黄色		
8	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(4.7)	破片	硬	やや粗	内:2.092.7 绿色 外:2.092.7 绿色		
9	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(6.3)	破片	硬	やや粗	内:2.097.7 绿色 外:2.097.7 绿色		
10	頸壺器	壺	SD01	—	—	—	体筒礪片	硬	やや粗	内:2.077.2 黄褐色 外:2.077.2 黄褐色 外:2.077.3 白色		
11	灰陶陶器	瓶	SD01	—	(8.2)	(1.9)	底20	硬	やや粗	内:2.071.1 白色 外:2.071.1 白色		
12	灰陶陶器	瓶	SD01	—	6.0	(2.3)	底100	硬	密	内:2.077.2 白色 外:2.077.3 白色		
13	山茶網	瓶	SD01	—	5.8	(5.6)	底50	硬	密	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
14	山茶網	瓶	SD01	—	5.8	(2.8)	底25	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
15	山茶網	瓶	SD01	—	6.0	(3.4)	底50	硬	密	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
16	山茶網	瓶	SD01	—	7.0	(2.4)	底40	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
17	山茶網	小瓶	SD01	6.4	6.6	2.0	完形	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
18	山茶網	小瓶	SD01	8.4	8.4	2.4	完形	硬	やや粗	内:2.077.2 (2.4) 深黄色 外:2.077.3 (2.4) 深黄色		
19	山茶網	瓶	SD01	—	7.0	(2.4)	底40	硬	やや粗	内:2.077.2 (2.4) 深黄色 外:2.077.3 (2.4) 深黄色		
20	山茶網	瓶	SD01	—	8	(3.2)	底40	硬	やや粗	内:2.077.2 (2.4) 深黄色 外:2.077.3 (2.4) 深黄色		
21	山茶網	瓶	SD01	—	6.8	(1.9)	底50	硬	やや粗	内:2.077.2 白色 外:2.077.3 白色		
22	山茶網	瓶	SD01	—	5.4	(3.3)	底100	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
23	山茶網	瓶	SD01	—	7.0	(2.8)	底100	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
24	山茶網	瓶	SD01	13.2	—	(3.2)	底15	硬	やや粗	内:2.066.2 (2.4) 深黄色 外:2.066.3 (2.4) 深黄色		
25	山茶網	瓶	SD01	13.8	—	(3.7)	底10	硬	やや粗	内:2.077.1 白色 外:2.077.2 黄褐色		
26	山茶網	瓶	SD01	14.6	—	(4.0)	1115	硬	やや粗	内:2.075.2 黄褐色 外:2.077.2 深黄色		
27	山茶網	瓶	SD01	13.8	6.8	(5.1)	40	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
28	山茶網	瓶	SD01	—	5.6	(1.6)	底50	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
29	山茶網	瓶	SD01	—	2.6	(1.7)	底90	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
30	山茶網	瓶	SD01	—	7.0	(3.4)	底25	硬	やや粗	内:2.077.2 深黄色 外:2.077.3 深黄色		
31	陶器	罐	SD01	—	9.4	(5.2)	底20	硬	やや粗	内:103W6.1 黄褐色 外:103W2. 黑色		
32	瓦器	瓦	SD01	—	—	(5.2)	山線部礪片	硬	やや粗	内:34/36. 黑色 外:34/36. 黑色		
33	石器	砾石	SD01	長軸9.2	短軸(5.9)	厚さ4.2	—	—	—	—	重さ400g	
34	石器	砾石	SD01	長軸13.6	短軸2.8	厚さ3.9	—	—	—	—	重さ371g	
35	陶器	壺	第2~3層	35	—	(5.5)	115	硬	やや粗	内:2.038.9 黄褐色 外:2.038.9 黄褐色		
36	陶器	陶器	第2~3層	—	12.0	(1.5)	底25	硬	やや粗	内:2.036.4 (2.4) 黄褐色 外:2.036.4 (2.4) 黄褐色		
37	陶器	水瓶	SP01	—	—	(8.5)	体筒礪片	硬	やや粗	内:2.038.7 黄褐色 外:2.038.7 黄褐色	図版6	
38	円筒埴輪	—	第2~3層	—	—	(3.4)	破片	硬	やや粗	内:2.036.6 绿色 外:2.036.6 绿色	図版7	
39	円筒埴輪	—	第2~3層	—	—	(4.3)	破片	硬	やや粗	内:2.036.4 深黄色 外:2.036.4 深黄色	図版7	
40	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(5.6)	破片	硬	やや粗	内:103W8.4 深黄色 外:103W8.4 深黄色	図版7	
41	石器	砾石	SD01	長軸19.8	短軸(15.0)	厚さ(13.0)	—	—	—	—	重さ440g、図版8	





V 総括

今回の調査で検出した遺構は、平安時代（11世紀前半）の道路遺構、鎌倉時代（13世紀前半）のピット1基、土坑3基、溝1条、鎌倉時代（13世紀後半以降）の掘立柱建物1棟である。

遺物は弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗、近世以降の瓦、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砾石、瓦が出土した。

平安時代（11世紀前半）SF01は、底面で波板状凹凸面を検出したことから、道路と判断した。凹凸面の痕跡の理由としては、運搬用の枕木の圧痕、牛馬歩行痕、滑り止めとしての路盤対策などや、路面築造に由来する雨水対策等の路床部構造などが考察されている。近郊の遺跡では、名古屋城三の丸遺跡第4・5次調査で検出されており、検出位置が、道路硬化面下の側講界であることから、路面の崩落防止、雨水対策としての機能が推定されている。今回検出したSF01は、底面に傾斜があり、人为的に礫を入れていることから、水はけを意識したものと考えられる。凹凸面の間隔は狭く、側面の立上がりが急であることから、底面を利用したとは考えにくく路面築造時の路床構造であると推測される。延長部に関しては、北約50m付近で行われた片山神社遺跡1次調査では同様の遺構が確認されていないことから、この東を延びるものと推定できる。この先には、社伝による創建が和同2年（700年）とある片山神社が存在しており、道路との関係が示唆される。当該期の遺構は少なく、調査地域は集落の縁辺部にあたると考えられる。

鎌倉時代（13世紀前半）SD01は、底面の傾斜が、段丘崖と逆方向に低く傾斜し、積極的な流水の痕跡も認められなかったことから、区画を目的としたものと考えられる。時期は既往の調査で検出された遺構と概ね一致するがこれらの遺構の分布状況からは、集落としての様相は明らかでなく区画の目的は不明である。

本調査では、平安時代（11世紀前半）、鎌倉時代（13世紀）の遺構を検出することができ、調査地がこの時期、集落、居住域の縁辺であった様相を窺うことができた。また、当地域は、绳文時代中期は集落として、弥生時代後期から古墳時代は墓域として土地利用されているが、これらの時期の遺構が、展開しないことが確認できたことも、今後、本遺跡の各時期の歴史環境を考察する手掛かりになると考えられる。

参考文献

- 藤澤良祐 2007 「第1章第2節 灰釉陶器から山茶碗へ」『愛知県史 別編 室美2』愛知県
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本文部省考古学協会
中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
近江俊彦 1997 「道路一覧」『古代交通研究』第7号
鷺坂有吾・下島健弘・杉山敬光 2017 『長久手遺跡発掘調査報告書』金城学院中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 株式会社二友組
名古屋市見附考古資料館 1987 『東区白壁三丁目 片山神社遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
伊藤正人 1996 『片山神社遺跡第2次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
額瀬茂 2002 『片山神社遺跡（第3次）』『埋蔵文化財調査報告書43』名古屋市文化財調査報告 56 名古屋市教育委員会
伊藤正人 1999 『東二葉町遺跡第2次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
藤井康隆 2005 『東二葉町遺跡第3次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
名古屋市見附考古資料館 1994 『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査－遺構編－』名古屋市教育委員会

半)
以
ど
屋
う、
の、
側
推
確
同
大、
水
検
く
査
代
期
掛
財
き
教
会



図 版







1. 調査区全景（南東上空から）



2. 遺構完掘状況（南上空から）

図版 2
遺構



1. 調査前状況
(南東から)



2. 調査区南壁
(北東から)



3. 調査区南壁 SF01 付近
(北から)



1. SF01 完掘状況（北から）



2. SF01 土層断面（北から）



3. SF01 凸面土層断面（東から）



4. SF01 凸面土層断面（北から）



5. SF01 遺物出土状況（東から）



1. SD01 完掘状況（東から）



2. SF01 南壁土層断面（西から）



3. SD01 セクション 1 土層断面（西から）



4. SF01 遺物出土状況（北東から）



5. SF01 遺物出土状況（北から）



1. SD01 遺物出土状況（北東から）

2. SD01 遺物出土状況（北から）



3. SD01 遺物出土状況（北東から）

4. SD01 遺物出土状況（南から）



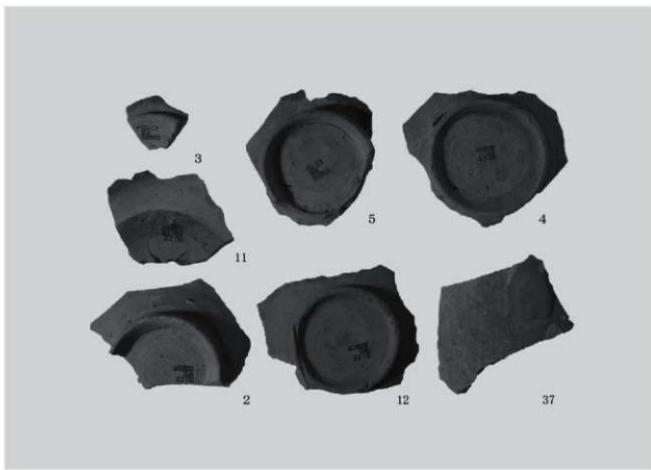
5. SK03 土層断面（南から）

6. SK03 土層断面（南から）

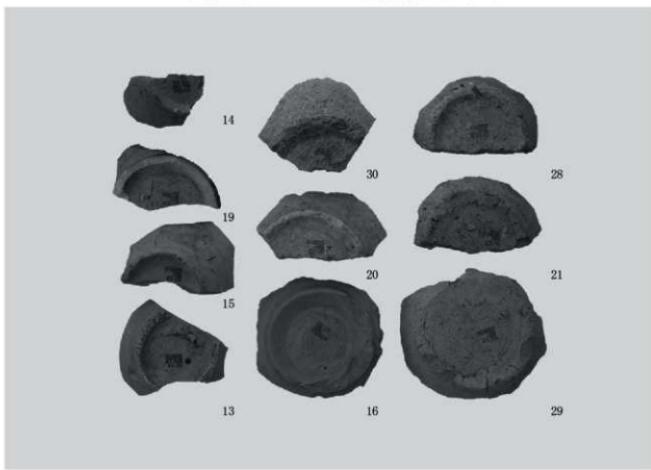


7. SB01 完掘状況（北西から）

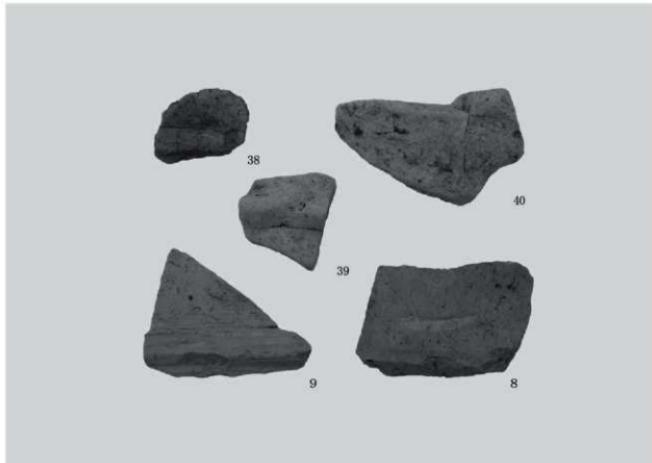
8. SB01-3 土層断面（南から）



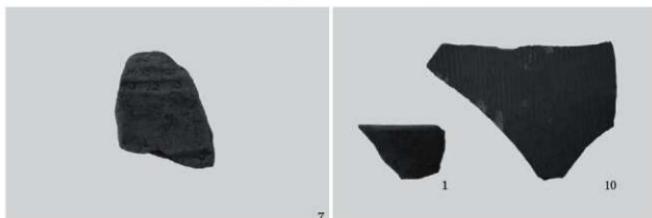
1. 灰釉陶器碗 (2 ~ 5 • 11 • 12)、須惠器水瓶 (101)



2. 山茶碗 (13 ~ 16 • 19 ~ 21 • 28 ~ 30)

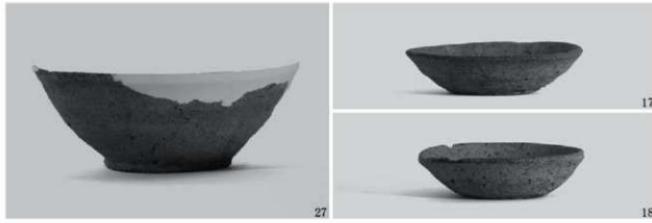


1. 円筒埴輪 (8・9・102～104)



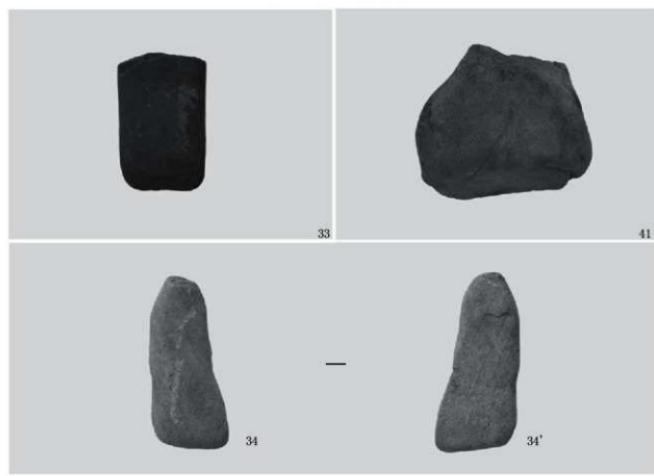
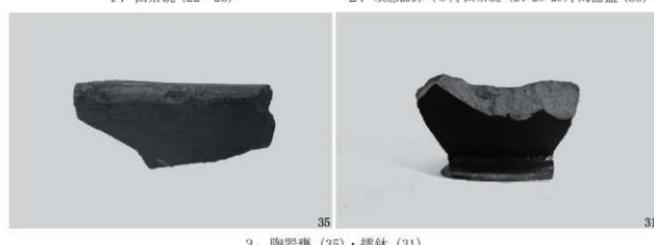
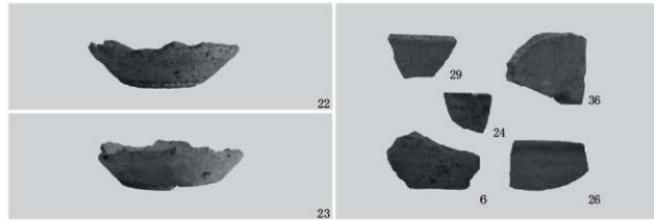
2. 弓生土器壺 (7)

3. 土師器壺 (1)、須恵器甕 (10)



4. 山茶碗 (27)

5. 山茶碗 小皿 (17・18)



4. 磚石 (33・34・105)



報告書抄録

ふりがな	ちようきゅうじいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	長久寺遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	真鍋直子、市田英介							
編集機関	株式会社 烏田組							
所在地	〒 581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2 TEL 072-949-2410							
発行年月日	令和4年(2022)4月30日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
長久寺遺跡	名古屋市東区 百塹3丁目 2801番1、2809番1、2810番1	23102	6°6'11''N 35°7'10''E	35度 11分 10秒	136度 55分 7秒	令和4年 1月11日～ 1月31日	約215m ²	事務所ビル 建設工事
所取遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長久寺遺跡	集落	平安時代	道路	灰軸陶器				
	集落	鎌倉時代	溝	山茶碗、砥石				

要約

調査地は、熱田台地の北縁の標高は約17.0mに位置する。遺構は平安時代の道路や鎌倉時代の溝などを検出した。出土遺物は主に平安時代の灰軸陶器、鎌倉時代の山茶碗であるが、近郊からもたらされた弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器の他、サヌカイトの剥片、埴輪などを確認した。道路は、底面に波板状凹面があり、水はけを目的とした様が人為的に入れられていた。検出方向から、北方に所在する片山神社との関係が示唆される。溝は底面の傾斜方向や機能時期の堆積から、区画を目的としたと考えられる。本調査でこれらの時期の集落縁辺部の様相の一端が確認できた。また、近隣で行われた既往の調査では、纏文時代中期の集落や弥生時代後期の方形周溝墓などが検出されているが、これらの時期の遺構が調査地に展開していないことを確認し、今後、集落、墓域範囲の推定など本遺跡の土地利用を考察していく上で手掛かりとなる成果が得られた。



長久寺遺跡第2次発掘調査報告書

令和4年4月30日発行

編集・発行 株式会社 島田組
〒 581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2
TEL 072-949-2410

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所